



緑豊かなキャンパスの中心に位置する11号館



開放感のあるエントランス。大型ビジョンも設置

新11号館 成蹊大学



新世紀のキャンパス



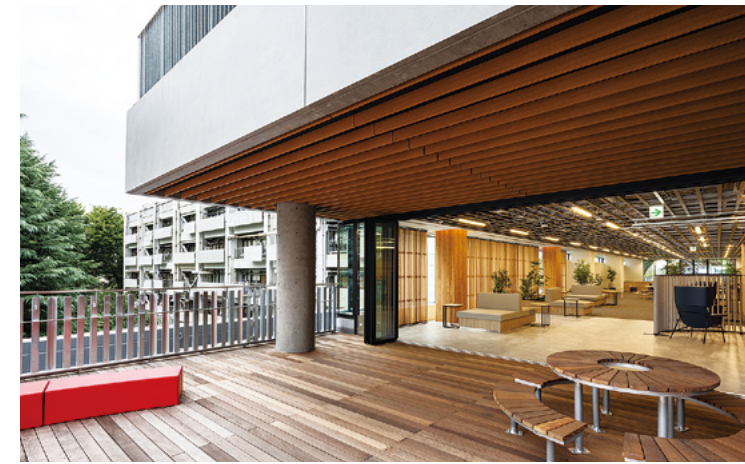
全てのフロアにアクセスできる吹き抜け階段。上下のフロアを可視化し、交流を促す設計



ゼミ等での発表やイベントで使用できるエリアのあるラーニングcommons



天井には特徴的な木の造作が施されている



3階のテラスからキャンパスが一望できるように設計



休憩や気分転換したい時に利用できるエリア



専属のアカデミック・インストラクターに学習指導を受けたり相談したりできるエリア



研究室が異なる学生同士が交流できるスペース(理工学部専用エリア)



木を積極的に取り入れ、脱炭素社会を意識した居心地の良い空間

文理融合のワンキャンパスにより 新たな価値を生み出す - 成蹊大学

個性あふれる街並みと豊かな自然が残る東京・吉祥寺にキャンパスを構える成蹊大学では、文系・理系の全5学部全学年の学生が同じ敷地内で共に学んでいる。学部横断型の教育プログラムや課外活動を通じ、専門の異なる学生が交じり合い、幅広い人間関係を築ける環境がある。その根底にあるのは、創業者・中村春二が目指した、画一的ではなく一人ひとりの個性を尊重する教育理念である。多角的な観点で物事を捉え、多様な価値観を持つ他者への共感、協働の精

神を持って社会を前へ進める人材を育てるために、大学は知的な成長と共に、人間的に大きく成長する場でありたいと考えている。

成蹊大学では、2024年9月より、新しい学び舎である新11号館(以下、「新棟」という)の利用を開始した。理工学部の最先端の研究環境を備えた研究室に加え、文系・理系の全ての学生にとっての学び合いの場となり、活発な交流が図れる開放的なラーニングcommonsが設置されている。本学が大事にしている、文理が融合した共創活動をより活発にするとともに、複眼的な思考を育ててほしい。そのような想いが新棟には込めら

れている。

理工学部の全研究室が集結。 他分野との交流スペースも

新棟の建設計画は、理工学部が2022年度から1学科5専攻に生まれ変わったことがきっかけである。学問分野を明確にした5つの専攻(データ数理専攻、コンピュータ科学専攻、機械システム専攻、電気電子専攻、応用化学専攻)を設置し、自分に合った専攻分野で深い専門知識を身につけるとともに、理工学科共通のICT活用力の向上と専攻の垣根を越えた融合分野の科目を履修し、学びの幅を広げられるようになった。その

一方で、理工学部が主に研究室棟として使用していた大学11~13号館は築55年を超え老朽化も目立ったことから、この3棟を解体し、新棟を新築することとなった。新棟には、研究分野ごとに建物が分かれていた理工学部約40の研究室が集結。これまではほかの研究室の様子が分かりづらい状況であったが、異なる分野の研究をしている学生や教員と自然につながるができる「交流プラットフォーム」を設け、あちこちに回遊して知識や情報を共有できるようにすることで「この研究室のこの研究は面白そう」という予想外の刺激が生まれ、未来の研究につながるアイデアや可

能性を生み出している。

交流・協働による新たな知の獲得と 発信の拠点「ラーニングcommons」

本学が重視する、文理融合のコラボ教育、プロジェクト型授業の推進、ICT活用教育等によるアクティブラーニングの推進を支えるための拠点として、種々のアクティビティに適したラーニングcommonsを設けている。「プレゼンテーションエリア」や「グローバルスクエア」、専属のアカデミック・インストラクターに学修指導を受けたり、相談したりすることができる「アカデミックサポートエリア」など、目的に合わせた6つの

エリアを設定している。「プロジェクトルーム」では、活動内容を認められたプロジェクトが一定期間優先的に利用することができるなど、企業、地域社会等外部のステークホルダーと連携して行う協働プロジェクトの活動も促進している。

留学生も含めた多様な学生の交流の場となり、他者との協働による新たな知の獲得と発信の拠点となるラーニングcommonsは、本学最大の特徴である文理融合を象徴する空間として、新たな学びや価値を生み出していく。

(文/成蹊大学 撮影/増子智美)